



## 知識を「活用」するとき

### 日記風にはじまります…板敷き土壇墓

今日は遠足。本当は 10 月 8 日だったんだけど、強い台風 18 号で臨時休校となり、今日になったというわけ。

私は、1, 2 年生と一緒に「真脇遺跡公園」へおじゃますることにした。久しぶりに真脇に行って、いろいろと新しいことを見てきた。そのうちの 하나가真脇遺跡縄文館に展示してあった「板敷き土壇墓(どこうぼ)」である。

縄文館へは以前にも 2, 3 度ほど来たことがあるのだが、そのときにはなかったものが、展示室の真ん中で一んと飾られてあったのだ。これは縄文時代の墓の一種だと思われるそうだ。

展示説明を読んでもいつ頃発掘されたのか分からなかったので、縄文館にいた知り合い(たまたま教え子のお母さんがいらしたのだ)に訪ねたところ、「先生だから特別ね～」と言いながら、ある資料を持ってきて教えてくださった。ありがたい。ちなみに、彼女は、朝、低学年集団より一足先に駐車場に入った私の車を見るなり、手を振っていた。まるで女子中学生だ。

で、その資料によると、この墓は平成 12 年に発掘されたそうだ。

「板敷き土壇墓」は、四角い穴を掘って板を敷き、その上に遺体を屈葬して埋めたあとのようだ。骨は土の重みで砕けているのだが、なんとなく足の骨も分かるし、歯もあった。赤い装身具のようなものもあって、縄文時代から身付的な違いがあったのではないかと思わせるに十分なものだった。帰りに、発掘調査団がまとめたという『真脇遺跡・板敷き土壇墓』(2002 年, 1000 円)も買って来た。

近くに住んでいながらもまだまだ知らないことがいっぱいある。



展示室にある土壇墓

### 習得したことを活用する場面

早速、帰宅してから『真脇遺跡・板敷き土壇墓』を読んでみた。10 ページの調査結果と共に、シンポジウムの記録(14 ページ分)が出ていた。

この記録は「真脇遺跡ミニシンポジウム」と題して、平成 13 年(2001 年)3 月に能都町社会福祉会館で行われた時のもので、「板敷き土壇墓」発掘を機会として開催された。コーディネーターは利行くんの祖母(当時、能都町教育長)。パネラーに 4 人の学者の人を迎えて行われた。

そこで、ちょっと興味深い話があったので、それ(うちの学校研究と関係あると私が考える話題)を抜き出してみよう。

考古学の学者さんたちは、今回のようにある人物の墓が出てくると、「それはいったいどんな立場の人の墓なのか」「どうして埋葬されたのか」など、いろいろなことを考え、自分なりの仮説を持って研究を進めることになる。そのとき、今まで自分が得てきた知識を総動員して考えることになるのだが…。

#### その1 面積 2 乗, 体積 3 乗の法則を使って考える

墓の大きさについて、パネラーが算数・数学の知識を応用して説明している場面がある。

さて、ところで大変おもしろいことに、4 基のお墓がありまして、しかもこれは並みのお墓でなくてちょっと



大型です。大型というのは、掘るのに、今みたいにスコップがあるわけではないですから、先の尖った棒のようなものでつついて土をほぐして、それを手ですくって、モッコのようなものに入れたりカゴに入れたりして土を出したりする訳です。これは 1 回り大きくなると、面積でも二乗と言って、長さが倍になれば2倍ではなく4倍になる訳です。それが立方体となるともっと大変になる訳です、土量が。これは皆さん、庭仕事をしたり農作業をしたりするとお解りのように、1回り穴を大きくしたとします、土の量はちょっと10cm回りを増やしただけで、3倍くらいの土の量に増えるわけです。(22p, 小林達雄氏, 下線は尾形)

「長さが倍になると面積は 4 倍、体積は 8 倍になる」ということは、算数・数学で習うことだ。これを考えないで、小さなモデル(模型)で成功したからといって、そのまま同じ材料で大きくしてもその物体は壊れてしまうことになる。それは、長さを 10 倍すると、体積は 1000 倍になり、もしそれが同じ材料を使うとすると重さも 1000 倍になるからだ。そこで大きなものを作るときには、全体を軽くする必要がある。強度を保ちながら軽くする方法として、例えばH型の鉄骨などが考え出されたのだ。

このように、いわゆる理科系の知識で理科系の技術者がそれを利用するというのは、まだ分かる。

しかし、今回のように、一回り大きな墓を作るために土を掘るとすると、その直径を 2 倍にしただけでも、掘らなければならない土は 8 倍になるのです。そんなことを考える中で、小川氏は次のような仮説を立てるのだ。

だから大型の墓を作ったというのは、橋本さんも触れられましたけれども、これは特別な人間である。(同上)

鉄製の鋤などさえない時代に、ある人間のために、全身が入るくらいの穴を掘り、そして下に板を敷き(このうすい板を作るのさえ、縄文の人たちは大変だっただろう)、丁重に葬ったというからには、やはり特別な人だったのだろう。

## その2 直線に並んだ3本の木柱…冬至は特別な日

二つめの話題は墓の近くから発見された「直線に並んだ3本の木柱のあと」である。2本ならば必ず直線になるが、3本並んでいるというのはいかなる意図のある並べ方ではないかという話の流れで出てきた話題だ。

ところでその側に三本の柱が並んで出てきました。私がかねがね話していたら、高田さんが頭の隅に、というか頭の真ん中に入れておいてくれたのかも知れませんが、ちゃんと「小林さん、どうもあれは冬至の日没の方を指している可能性が強い」、というようなことを行って私を喜ばせてくれて、そして写真も撮ってくれました。(同上, 23p)

「遺跡を見るときには、太陽の位置に気をつけておけばよい」というのは考古学の常識なのだろうか。外国の遺跡の話にも「この石柱の間から太陽が昇ってくる」なんてあるくらいだからなあ。小林氏は「中でも冬至は特別な意味があるのだ」という。

それは単に太陽の位置だけの話ではなくて、秋分が終わって段々北寄りに太陽の昇り沈みと言うのが動いて行くに従って日が短くなります。寒さが募ってきます。そういうような事がいっぱい在って、今までの仕事時間とまた野外の仕事も電気がない訳ですから、すぐに切上げて来なくてはいけない、遠出は出来ない、舗装道路が無いところに戻ってくる訳ですからね。そうするとそうやって色々な生活の中で、日が短くなっていくのは大きな事だし、一方では寒くなると言うのも大変な事です。そしてそれを肌で感じながら、しかも目で冬至を見ていく訳ですね。そしてもうこの世の終わりだ、という程、日が段々短くなっていくときに、戻る訳です。その限界が冬至な訳です。世界中の各地でその冬至のときにオマツリをします。そのお祭りをするというのは、世界のあちこちで残っています。(23p)

以上のように説明して、「この3本の柱は、明らかに意識的にならべたものだ。その方向は、冬至の時に太陽が沈む方向を指しているのだ」という仮説を立てるのだ。

習得したことを活用して考え、判断する、その学者の実際の姿が垣間見られる記録だった。

